

2014年12月7日 礼拝メッセージ

聖書：ヨナ書1章7～17節

説教：私たちを滅ぼさないでください

あらすじ

待降節の第二週目を迎えております。今日も続けてヨナ書を開きながら、主が私たちのところに来てくださったことの意味を考えていきます。

神はあるときヨナに向かって、「立ってニネベの町に行き、救いのみことばを語りなさい」と告げました。ところがヨナは、ニネベとはまったく反対の方向に逃げていきます。後でわかることですが、神がニネベを救おうとしていることにヨナが腹を立てたからでした。それでできるだけ遠くに行くために船に乗り込みます。ところがその船が大嵐に遭い、沈みそうになってしまった。それが前回までのあらすじでした。

1 主に向き合うヨナ

1) だれかわざわいをもたらしたのか

今日はその続きとなります。水夫たちは嵐から逃れるためにできる限りの手を尽くしました。しかしどうにもなりません。これは今まで経験したことのない嵐です。だれかがこの船にわざわいを持ち込んだ。それが嵐の原因ではないかと疑い出します。

今なら、「それは迷信だ」と言って笑われることかもしれません。しかし、皆さんはこんなニュースを聞いたことがあるはずです。ある野球監督のことですが、自分のチームが負けが続いて順位が墮落していく。いろいろ手を尽くした。もう何もできない。それでいつもは右足からズボンをはくのに、きょうは左足からはいてみた。そんな話をまじめにし

ていました。迷信だと口では言いながら、世の人たちは意外に見えない何かの働きを非常に気にしているのです。

2) 主の御顔を避けて逃げている

水夫たちは、この災難がだれのせいであるのか、そのことを突き止めるためにくじを引くことにしました。そうしたらヨナに当たってしまいます。それまでヨナは、自分に関係がないという顔をし、船底に隠れていましたが、とうとう9節でこう言わざるを得なくなります。「私はヘブル人です。私は海と陸を造られた天の神、主を恐れています。」主から逃げている人間が、同じ口で「私は主を恐れています」と言うのですから、なんとも笑ってしまうような話です。しかしこれを聞いた水夫たちは笑ってられない。足の下から震えてくるような恐怖に襲われてしまいます。どうしてそこまで恐れるのか。少し説明が必要です。

ヨナは、船に乗るときにこんなふうの説明していました。「自分は、主の御顔を避けて逃れようとしている。それでこの船に乗りたい。」船に乗るにしては、かなり詳しい説明です。普通私たちは飛行機や船に乗るとき、個人的な事情を尋ねられることはありませんから、なぜそこまで言わなければならないのかと首をかしげたくります。

今なら技術が発達して船の安全は十分に確保されています。しかし、ヨナの時代、船はかなり危険を伴う乗り物でした。今なら迷信として笑われるような目に見えないこと

でも気にします。万が一にも船にわざわいが持ち込まれたら大変なことになる。そこで、お客を乗せるときにチェックをすることにしました。そこにはこんな質問があります。「あなたは自分の信じる神と良い関係にあるか。」ヨナはどう答えたか。自分の信じている神であるかどうかには触れずに、とにかく神から逃げているとだけ答えました。係員は、ヨナが信じていない神の近くにいるのがいやで、そこから逃げてきた。そんなふうを受けとめ、それなら問題ないということで乗船を許可しました。

ところが事実はそうではなくて、ヨナは神を信じていて、その神に逆らって逃げている、そのことが船の全員に知る所となっていました。これは紛れもない、わざわいそのものです。恐れていたことが現実となっていました。それで水夫たちは大きな恐怖に突き落とされたのです。

3) ヨナのしたことがほかの人を巻き込んでいく

ヨナは、事実を隠して船に乗り込みました。その結果、ほかの人たちが巻き添えになり、死ぬか生きるかで大混乱になってしまいます。自分が神に背中を向けている限り、船に乗っている人たちは死にます。そうならないようにするためにはどうするか。もはや、自分が向きを変えて主に顔を向けるしかありません。

ヨナは覚悟してこう言います。12節。「私を捕らえて、海に投げ込みなさい。そうすれば、海はあなたがたのために静かになるでしょう。わかっています。この激しい暴風は、私のためにあなたがたを襲ったのです。」

2 ヨナを投げ込む

疑ったとおり。わざわいが船に持ち込まれていました。ヨナを海に投げ込めば自分たちは助かります。原因がわかり、解決策も与えられました。しかし、それではヨナを殺すことになります。さすがに乗組員たちはかなり迷ったようです。けれども結局ヨナを海に投げ込みます。その時彼らはこう言います。14節。「ああ、主よ。どうか、この男のいのちのために、私たちを滅ぼさないでください。罪のない者の血を私たちに報いないでください。主よ。あなたはみこころにかなったことをされるからです。」こう言って、ヨナを海に投げ込んでしまいます。

この中の「罪のない者の血を私たちに報いないでください」というところに注目します。乗組員たちの目から見ると、ヨナは、自分の信じる神に逆らったのかもしれないけれど、海に投げ込まれて殺されるような罪は犯していない。それで「罪のない者」と言うのです。自分たちが助かるためには、罪のない者を海に投げ込まなければならない。罪悪感を感じます。もしかしてヨナの信じる神が怒って、自分たちが滅ぼされるかもしれない。そのことを恐れます。でも、ヨナを投げ込まなければ船が沈み、全員死ぬことは明らかです。神の罰があるかどうかわからない。とにかく、ヨナを投げ込む以外に助かる道はありませんでした。

3 イエス・キリストとヨナ

1) 罪のない者を殺してしまった

イエスはあるとき「この時代は、ヨナのしるしのほかにしるしは与えられません」と語りました。ヨナの身に起きたことを通して主イエスのお姿を見ていきたいと思えます。

乗組員たちは、ヨナを投げ込むときこう叫びました。「この男には罪がない。」彼らが心の中に感じた切実な思いをそのまま叫んだことばです。

けれども時間が経ち、イエスの十字架のことと重ねていくとき、非常に深い意味があったことに気がつきます。自分たちが今殺そうとしている男ヨナには罪がない。それと同じように、十字架につるされたイエスと呼ばれる男。あの男には死罪となるような罪はない。そのような結びつきです。

2) 私たちを滅ぼさないでください

罪がない者を殺したらどうなりますか。殺した者の罪が問われていきます。裁判にかけられ、裁判長はこう質問するでしょう。「あなたはなぜあの男を十字架で殺したのか。」どう説明しますか。イエスは何か私たちに悪いことをしたのでしょうか。悪いことをしたというのなら、殺したとしても情状酌量の余地はあるでしょう。でも、何も悪いことはしていない。いやむしろ良いことばかりをしてくださった。病にある者をいやし、悪霊を追い出し、子どもを亡くした母親と一緒に泣き、差別されている人たちと一緒に喜んで食事をされました。それなのに私たちは主イエスを十字架で殺してしまいました。なぜか。ヨナの話からわかります。自分が助かりたいからです。ヨナを海に投げることは恐ろしかったかもしれませんが、でも結局、自分が助かりたかった。だから海に投げ込みました。自分がかわいいのです。ほかの人よりも、自分のことが大切なのです。それで神の子を殺してしまいました。私たちはどうなるのでしょうか。やっぱり滅ぼされるのでしょうか。

いいえ。これが主のみこころでした。私た

ちは、身勝手な自分中心の思いから主を十字架に追いやったのですが、それが主のご計画だったのです。ヨナは言いました。「私を捕らえて、海に投げ込みなさい。」彼は、こう言って、イエスの身に起きることを預言していたのです。

3) 降りてこれらることにより、私たちはこの方に巻き込まれていった

さて、少しへそ曲がり方はこんなふうに見えるかもしれませんが。ヨナが船に乗ったことでほかの人たち大迷惑してしまいました。ヨナはとんでもない自分勝手な男だ。それが主のみこころだなんてとんでもない。

イエスも同じである。主が私たちの所に降りてこなければ、嵐は起きなかった。十字架で殺す必要もなかった。ところが、神の方から勝手に降りて来て、人間を罪人呼ばわりし、信じないとさばかれると言われてしまう。クリスマスは大変迷惑な出来事だ。と言うことになります。

でももしこの方が降りてこれなかったのならどうなったのでしょうか。波は穏やか、船は順調に進んでいるというのなら結構でしょう。でも外は嵐です。手は尽くしましたが、船が沈みかけています。どうしますか。もしこの方が来られなかったのなら、どこにも救いはないことになります。

私たちを十字架に巻き込むためにこの方は降りてこれられました。そして、私たちがこの方を十字架にかけました。あの水夫たちは、ヨナを海に投げ込んだことでどうなったでしょう。彼らは滅ぼされましたか。いいえ、助かりました。本当の神を知らない人たちでしたが、このようにして彼らは救われました。

私たちも同じです。この方は、私たちの手

によって海に投げ込まれるために、私たちの
所へ降りてこられました。それが神さまの救
いのご計画であったことを覚えます。